

「基調提案」及び「基調提案に関する解説・補説」について

元・日本言語技術教育学会会長
大内善一

ここに掲げる「基調提案」は、平成28年8月6日に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて開催された第26回日本言語技術教育学会で行われました。

提案は、本学会・理事会の意向を受けて、会長が自ら行いました。

趣旨は、本学会が言語技術教育の概念規定を明らかにし、その目的・内容・方法を広く内外に示して、開かれた議論を進めていくための叩き台とするところにあります。大会冒頭の20分間という限られた時間の中での提案でしたので、十分に意を尽くした提案とはなっていないと存じます。しかし、本学会としてはこれまで、各支部における研究作業と、年に一度の大会での提案授業を中心とした活動に限られておりました。「言語技術」の概念規定を巡る論議は等閑にされてきました。当然、「言語技術」の具体的な姿とはどのようなものなのか、を巡る議論は等閑に附されてきたと言えます。

このような状況の中では、各支部からの提案も内外からの批判を受けて磨き上げられたものとなるはずがありません。本学会が発足して早26年になります。「大山鳴動して鼠一匹」となる恐れがなきにしもあらずです。それでも、思うところを率直に述べ合い、是々非々で議論の渦を巻き起こすべく、この「基調提案」を以て一石を投じる事に致しました。

なお、この「基調提案」は、最初に述べましたように20分という限られた時間内で行ったものであります。そこで、提案を行った際に、後日、学会のホームページにおいて「基調提案に関する解説・補説」をさせて頂くことをお約束致しました。それが、「基調提案」に続いて掲載されております記事でございます。今しばらく、この「解説・補説」をお読み頂いて、会長である私の考えているところをお酌み取り頂ければ幸いに存じます。

なお、この私の「基調提案に関する解説・補説」には、本学会理事である望月善次理事からご懇切なご意見を頂戴しております。望月会員とは、私との間でメールを通して3度の意見交換が行われております。望月会員の真摯にして誠実な対応に会長として心より御礼を申し上げます。学会としては、このような議論が不可欠です。本学会を、内に閉ざされた集団でなく、真に学会らしい学会とすべく皆様からの建設的なご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

今回、この本学会HPをご覧下さった皆様には、今後も折に触れてこのHPに眼を通して頂きたくお願い申し上げます。今後は、このHPを通して本学会としての情報発信を盛んにし、皆様との交流を図って参りたいと存じております。

日本語技術教育学会 第26回東京大会

開会の挨拶・基調提案

会長：大内善一

開会の挨拶

基調提案

【「言語技術」に関する 大内の定義】

「言語技術」とは、話したり書いたりする行為をよく噛み砕かれた分かりやすい言葉で簡潔明瞭に行い、またその行為を適切かつ的確に聞き取り・読み取るための方法である。

【授業場面における「言語技術」 の使用者】

- ① 教材の作り手である書き手・話し手
- ② 学習活動を営んでいる学習者
- ③ 学習者を指導する立場の教師

「言語技術」 I

言語行為者(=文章教材の書き手、話し言葉教材の話し手)がその言語行為の中で用いている言語技術(=各種の表現技法など。)

「言語技術」Ⅱ

I の言語技術を把握・理解するための学習者の言語技術（＝読み取る・聴き取る・学び取るための言語技術。言葉を手段とした学習技術・学び方の技術が該当する）。

「言語技術」 Ⅲ

Ⅱの言語技術を身につけさせるための教師の言語技術(=言葉を手段とした教授技術、主に教師の発問・指示・助言・説明・対応などの指導言がこれに該当する。)

「言語技術」I の事例

【「ごんぎつね」の場合】

① 〈語り〉の表現＝語り手の読者に対する語る姿勢が何らかの形で示されている表現。

- ・ これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。
- ・ むかしは、わたしたちの村のちかくの中山というところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

② 〈会話〉の表現＝登場人物が声に出した言葉を語り手が「 」で引用している表現。人物の性格や人柄まで描き出す働きを持つ。

- ・「うわあ、ぬすっとぎつねめ。」
- ・「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」

③ 〈内話〉の表現＝登場人物が心の中で思っている言葉を語り手が引用している表現。人物の内面や心の動きを具体的に描き出す働きがある。

・「兵十のおっかあは、床についていて、うなぎが食べたいといったにちがいない。(中略) ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら、死んだんだろう。ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

- 「おれとおなじひとりぼっちの兵十か。」
- おれが、くりやまつたけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじゃアおれは、ひきあわないなあ。

【「天気を予想する」の場合】

① 〈設疑法(誘いかけ法)〉＝読み手を無意識のうちに書き手の問題意識の方向に誘導して、書き手と一緒にその問題について考えていこうとする姿勢を作らせる方法。

- ・的中率は、どうして高くなったのでしょうか。
- ・では、さらに科学技術が進歩し、国際的な協力が進めば、天気予報は百パーセント的中するようになるのでしょうか。
- ・それでは、突発的・局地的な天気の変化を予想するために、できることはないのでしょうか。

② 〈数詞〉＝説明的な文章に頻出する。事柄や事象を具体的・実証的に説明するための表現の一種。

- ・一九七〇年代には八十パーセントに満たなかった的中率がだんだん高くなり、二〇〇〇年を過ぎると八十五パーセント以上になったことが分かります。
- ・二〇一二年現在、日本では、約千三百か所にアメダスの観測装置が設けられ、その地点の降水量を常時測定しています。
このうち約八百四十か所では、気温・風向・風速なども観測します。
- ・また、全国二十か所に設置されている気象レーダーは、半径三百キロメートル内の雨雲の分布を電波で調べています。（以下略）

③ 〈表・グラフ・写真〉の表現＝言葉では簡単に説明しがたい部分を補完的に説明する役割を果たす。

- ・〈表〉＝天気予報の的中率の向上。
- ・〈グラフ〉＝天気の予報を難しくしている要因の一つ。突発的な天気の変化。
- ・〈写真〉＝天気の予報を難しくしている二つ目の要因。局地的な天気の変化。

「言語技術」Ⅱの事例

【「ごんぎつね」の場合】

- ① **音読の技術**（＝速度、抑揚、間の取り方、感情移入の仕方、地の文と会話文・内話文の読み方の区別などを踏まえた様々なレベルでの技術）

《ごんの兵十に対する思いを読み取る技術》

- ・「兵十のおっかあは、床についていて、うなぎが食べたいといったにちがいない。（中略）ちょっ、あんないたずらしなけりゃよかった。」

- ・「おれとおなじひとりぼっちの兵十か。」
- ・おれが、くりやまつたけを持って行ってやるのに、そのおれにお礼をいわないで、神さまらお礼をいうんじゃアおれは、ひきあわないなあ。

② 要約の技術（＝各場面の〈見出し〉をつける。）

《場面ごとの〈ごん〉の行動・心情を端的に一語で表す技術》

※「ごんの〇〇〇〇」の形で

- ・一の場面（「ごんのいたずら」
- ・二の場面（「ごんの後悔」）
- ・三の場面（「ごんのつぐない」） 以下略

- ③ 話し合い・聴き合いの技術(=根拠となる言葉をもとに互いに考えを出し合って、より適切妥当な解釈に迫らせ、思考を深め合わせる方法)。

《前の発言者の発言を踏まえて発言する技術》

- ◇「〇〇さんにつけ足して」
- ◇「私もそう思うのですが」
- ◇「〇〇さんの意見を聞いて気がついたのですが」
- ◇「見方を変えると」
- ◇「みんなと少し違うのですが」

「言語技術」Ⅲの事例

- ① 発問の技術(=学習者の思考を触発し、活発にさせる発問)
- ② 指示の技術
- ③ 説明、解説の技術
- ④ 助言の技術
- ⑤ 対応の技術(=称賛・激励・共感・補説の技術)

【「ごんぎつね」の場合】

① 発問の技術

- ・「兵十はごんのことを『うわアぬすときつねめ。』と、どなりたてていましたが、ごんは本当にうなぎをぬすんだのでしょうか。」
- ・「六の場面に『兵十はかけよってきました。』とありますが、語り手は誰の立場から見ているのでしょうか。」

② 指示の技術

- ・「各場面の〈見出し〉を、ごんの行動・心情を簡潔に表す言葉で『ごんの〇〇〇』と表しなさい。」
- ・「『ごん』というきつねの特徴を表している言葉を文章中から探しなさい。」

⑤ 対応の技術

◇称賛の技術＝「良くできた」とほめるだけでなく、「丁寧にやった」「最後までやった」と過程をほめてやる。また、「正しくできた」ことばかりでなく「〇〇君、とても良い間違いをしてくれたね。」と、みんなが間違いやすいところを取り上げてやる。

◇激励の技術＝子どものやる気を引き出してやる技術。

◇共感の技術＝子どもの発言に対して、「先生の考えと同じだ。」と共感を示してやる。

◇補説の技術＝子どもの考えを「その考えは、つまり、こういうことだね。」と補説・補足をしてやる。

本日の模擬授業における課題

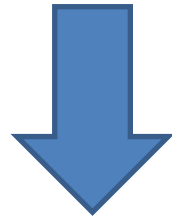
- ① 「言語技術」Ⅰ（＝書き手）としてどこが取り出されていたか。
- ② 「言語技術」Ⅱ（＝学習者）としてどんな学習技術が設定されていたか。
- ③ 「言語技術」Ⅲ（＝指導者）としてどんな教授技術が用いられていたか。

「言語技術」解明に向けた今後の課題

- 授業実践を通して「言語技術」Ⅱの開発に努めたい。
- 授業実践を通して「言語技術」Ⅲの開発・錬磨に努めたい。
特に、「対応の技術(＝称賛・激励・共感・補説)」についての改善・開発に努めたい。

言語技術教育の目指す方向

【定型化・マニュアル化・単純化それ自体を目的とするものではない。】



【場と状況に応じて、簡潔で分かりやすく、きめ細やかに言葉を駆使することのできる能力の育成を目指すものである。】